北海道医報
ISSN 0913-0217　2022.11.1. 第1250号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

季風

マスクを外す日
―遥か世界の潮流を離れて―

情報広報部　山科　賢児

新型コロナが２０１９年末から流行し始めて３年になろうとしている。未だ感染が収まらず「こんなはずではなかった、なぜこんなことになったのか」と不安と諦めが社会に漂う。医療現場の混乱に加え、行動制限やマスクなどのコロナ感染対策の影響により、社会生活上必須である人とのコミュニケーションや移動が制限され、肉体的な衰えや精神的ストレスが人々の健康を害し、取り返しのつかない事態となっている。「何とかならないのか、もういい加減にしてほしい」が偽らざる気持ちである。

２０２２年９月19日、イギリスのエリザベス女王の国葬がロンドンで執り行われた。参列した天皇皇后両陛下をはじめ、どの国の元首や首脳も会話の際はマスクなしであった。９月27日の安倍元首相の国葬では海外からのどの参列者にも日本政府はマスク着用を要請した。参列者は全員マスクを外さず、追悼の辞を述べる時にはマスクを外すという光景が映し出された。

地下鉄の車内では「マスクの着用をお願いします」とアナウンスが流れ、屋外で行き交う「マスクなし」の人は稀な存在である。入店の際はマスクの着用を求められ飲食時はマスクなしの会話となる。フランスから先日帰国した人は「もうマスクをしていないし、ＰＣＲセンターは見つからない。もはやコロナなどなかったかのように暮らしている。ニュースにもならない」それが日本に戻ってくると光景は一変し、99％の人々がマスクをして街を歩いている。「まるで異次元の世界に迷い込んだようだ」と話していた。

世界保健機関のテドロス事務局長は９月14日、新型コロナウイルスのパンデミックの「終息が視野に入った」との認識を示した。18日アメリカのバイデン大統領は取材に対して「パンデミックは終わった、皆マスクをしていないのに気づいているだろう」と応じている。

感染流行当初からマスクは感染対策の必需品となった。しかし日本人のほぼ全員がマスクを着用し、ワクチンを接種して感染予防対策を徹底したのにも関わらず、世界で一番の感染者を出している。これほど真面目にワクチンを打ちマスクをしているのにどうして感染の増大と減少を繰り返すのだろうか。マスクが感染対策として今や必ずしも有効と考えられない事実が目の前にあるのに、日本はマスク着用になぜ固執するのだろうか。

元陸上選手の為末大さんがＳＮＳで「私たちの国は『なにかあったらどうするんだ症候群』にかかっています」と発信して話題となっている。「何かあったらどうするの、責任を取れるの。それなら好きにやってみたら、僕は責任を取らないよ」このようなやり取りは日本の社会ではよく目にする。そう言われてしまうと多くの場合は決断や行動を躊躇する。これが日本の意思決定方式であり、「社会に安定と秩序をもたらすが、社会の停滞と個人の可能性を抑制することになる」結局今まで通りで何も決まらず何も変わらない。決して「俺が責任を持つからやってみようよ」とはならない。しかし「やってみよう、やってみなければ、やってみなければわからない」とリスクを取らなければ、現在の延長線上の未来が得られるだけである。リスクの語源は「勇気を持って挑戦する」意味を持つそうだ。それがいつの頃からか挑戦ではなく、「危険」の意味合いが強くなってしまった。

社会で事件や問題が起こると今の規則や法律では不十分とされ、法改正など規制の強化に動くのが日本の常套手段である。これでは問題の原因の解決とならず、むしろ既得権益や利権を生みだし、自らの自由を失い管理されることになる。また制度の不合理に気づいても規則を絶対視して、緩和や廃止する勇気と決断力がないのも日本らしい。マスクについても着用が半ば義務化するともう外すのが容易でなくなり、日本は遥か世界の潮流から遠ざかってしまった。

責任やリスクを回避すべく「マスクは場面に応じた適切な着脱を」という厚生労働省と、「マスクを外してください」の声を待ち望んでいる同調圧力に弱い国民との間で探り合いが続いている。新型コロナの感染対策の象徴であるマスクを外す時「新型コロナは終息」する。だが新型コロナによって分断された社会や翻弄された日本人の生活や意識は元に戻るのだろうか。

日本にもいつか「マスクを外す日」が来る。その時は科学的根拠や自分たちの意思によらず、情緒的感情やその場の「空気」によってなし崩し的な形で決まりそうだ。過ぎたことについて「もうとやかく言う必要はない」、本質的な議論を避け「決まったのだから、もうそれでいい」そして今までの事は何もなかったかのように、いつもの生活にまた戻る。それが日本の流儀であり、凋落の深い根底となっている。